

★学校教育目標	○たくましい子	○たすけあう子	◎かながえる子	★重点計画の概要
★目指す学校像（ビジョン）	【めざす児童・生徒像】 ① 心身共に強く健康な児童 ② 温かな心もち、力を合せて活動する児童 ③ 郷土を愛し、自ら考え表現する児童 【めざす学校像】 ① 学び活動する楽しさがある学校 ② 安全・安心で、豊かな情操を育む学校 ③ 保護者・地域と共に歩む学校 【めざす教師像】 ① 全ての児童に学ぶ喜びを味わわせる教師 ② 児童相互の友情や信頼を築く教師 ③ 学校組織を活性化させる教師			○食への関心を高めるとともに、すすんで運動する習慣を身に付けさせることにより、健康で体力を高める児童の育成に努める。 ○望ましい人間関係の形成を図り、話し合いを通して考えを深めることができる児童の育成に努める。 ○地域密着型の学習活動を実施して思考力・判断力を育てるとともに郷土や国に対する誇りをもたせる。 ○児童が「わかる」「できる」といえる授業をめざしてユニバーサルデザイン化を進め、家庭学習と運動して基礎的・基本的な学力の定着を図る。 ○いじめの発生を防止する。

領域	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価指標・評価基準				学校評議員・学校運営協議会の意見	結果の分析と改善策		
				評価点	取組指標		評価点			成果指標	
子供	小中9年間の学びの連続性の中で、学区域（豊田、川辺堀之内、南平）や日野市に愛着をもち、考える児童を育成する	・9年間の学びの姿を系統的に整備し、学区域や日野の自然、歴史生、活等についての思いや考えをもち語り合うことができるようにする	・教員が地域の教育資源について理解を深める。 ・別様に基づいて指導計画を練る。 ・指導後、実施報告書を作成する。	4	4	地域のかかわりの中で、発見し課題追究する単元を学期に1回以上実施する教員が70%以上	4	4	学区域や日野市のよさを表現することができた児童が全体の70%以上	郷土愛を深めるための、地域での学習は概ね良い。子供たちが持てる力を発揮して地域で学習し、成果が出ている。今後も、地域の教育力や教育資源を大いに活用してほしい。また、地域の名前が学校名となり、今後も郷土を愛する心がもてる児童の育成を進めてほしい。	各教科、道徳及び総合的な学習の時間等で地域について考え、地域から学ぶという実践を積極的に、地域から学べることができた。9年間の学びの姿を整備し、地域の教育資源や学習教材を資料化し、確実に次年度に引き継げるようにする。
					3	地域のかかわりの中で、発見し課題追究する単元を学期に1回以上実施する教員が60%以上		3	学区域や日野市のよさを表現することができた児童が全体の60%以上		
					2	地域のかかわりの中で、発見し課題追究する単元を学期に1回以上実施する教員が50%以上		2	学区域や日野市のよさを表現することができた児童が全体の50%以上		
					1	地域のかかわりの中で、発見し課題追究する単元を学期に1回以上実施する教員が50%未満		1	学区域や日野市のよさを表現することができた児童が全体の50%未満		
教職員・学校	ユニバーサルデザイン（UD）化された授業の中で、児童が個人で研究したり集団で思考したりする授業を開発する	・授業をUD化するとともに、通級指導学級やリソースルームとの連携を図り、全ての児童が参加し理解できる授業を行う ・授業の中で話し合い活動を行い、コミュニケーション能力を高めるとともに、集団で考える態度を身に付けさせる	・授業のUD化について研修を行い教員間で共通理解を図り実践していく。全ての児童に学ぶ喜びをもたせるようにする。 ・教員間で授業を見合う機会をもち、チェックリストを活用しながら改善を図る。 ・授業の中で、個人で考える時間や集団で話し合う時間を設定する。	1	4	全教員が学期3回以上指導案を作成し、他の教員の参観とコメントを得る	4	4	授業内容を理解できている児童が、90%以上	授業のUD化への取り組みが良い。UD化でどの子にも分かりやすい授業の組み立ての工夫がされている。授業のUD化は、よい授業を目指した授業改善として捉え、引き続き、児童の学び力の向上に取り組んでほしい。	他の教員の授業を参観し、コメントを互いに交わしながら授業のUD化を進めることができたが、指導案を作成し交流するには至らなかった。次年度は、夏季研修会を設定したり、授業のUD化を促進するための実践例を各学年、専科、せせらぎで学期ごとに記録し報告したりして授業のUD化を進める。
					3	学期3回以上指導案を作成し、他の教員の参観とコメントを得る教員が80%以上		3	授業内容を理解できている児童が、85%以上90%未満		
					2	学期3回以上指導案を作成し、他の教員の参観とコメントを得る教員が60%以上		2	授業内容を理解できている児童が、80%以上85%未満		
					1	学期3回以上指導案を作成し、他の教員の参観とコメントを得る教員が60%未満		1	授業内容を理解できている児童が、80%未満		
学校、家庭、地域・社会	家庭での学習習慣を定着させる	・家庭との連携を図り、自主的に家庭学習に取り組む態度を身に付けさせる ・児童に家庭学習の成果を感じ取らせ、自学自習の良さを味わわせる	・宿題と家庭学習のすみ分けを明確にし、保護者に家庭学習のすすめ方を周知する。 ・家庭学習のやり方を示し、児童が主体的に取り組めるよう工夫していく。 ・学年の系統性をもたせ、ノートは学年共通のものを使用し、見開き1ページを使う方法で統一する。	4	4	家庭との連携を図り、工夫して家庭学習を積極的に推進する教員が90%以上	4	4	学年×10分の家庭学習に毎日取り組んだ児童が90%以上	家庭学習や宿題について1年生から6年生までの系統性を考慮するなどして具体的な方策で継続的に取り組んでいく必要がある。保護者向けに家庭学習の必要性や進め方のコツを伝えるなど具体的な働きかけを工夫し、家庭と連携して継続的に進めていく必要がある。	家庭学習の指導の仕方などを工夫しながら取り組めたが十分な成果を上げるには至らなかった。家庭学習の進め方の1年生から6年生までの系統性や指導法等を検討して、平成28年4月から全校で実施できるようにする。また、「豊田小学校 家庭学習 虎の巻」を保護者に配布して協力を促すとともに、児童に対して家庭学習が年間を通じて継続的に実施できるよう指導する。
					3	家庭との連携を図り、工夫して家庭学習を積極的に推進する教員が80%以上		3	学年×10分の家庭学習に毎日取り組んだ児童が80%以上		
					2	家庭との連携を図り、工夫して家庭学習を積極的に推進する教員が70%以上		2	学年×10分の家庭学習に毎日取り組んだ児童が70%以上		
					1	家庭との連携を図り、工夫して家庭学習を積極的に推進する教員が70%未満		1	学年×10分の家庭学習に毎日取り組んだ児童が70%未満		
生活指導	いじめをゼロにする	・早期発見、早期対応をする ・いじめの起きにくい学級を実現する	・2か月に1回いじめ実態調査を行い、担任が状況を把握するとともに、毎週の生活指導夕会において、児童の状況を報告して情報を共有し、全職員で対応していく。 ・児童の自己肯定感を高め、互いに認め合う思いやりの心を育てるために、全教育活動を通して『生命尊重』『思いやり』について毎学期指導する。	3	4	月2回以上、『生命尊重』『思いやり』に関する指導を行う	3	4	学期末に継続しているいじめの件数が学校全体で0件	いじめをゼロにするという取り組みが成果を上げている。いじめの起きにくい学級の実現に対する教員の努力が認められる。また、生命尊重と思いやりに関する観点をもって指導に当たることがよいことである。いじめの早期発見、早期対応、組織的な対応に関して努力が認められる。	「生命尊重」「おもいやり」に関する指導に重点を置いたことで、成果を上げることができた。今後は、学級への所属感や自己肯定感、自己有用感を高めていく指導を工夫し、「いじめ」の起きにくい学級づくりを進める。また、いじめに関するアンケートや調査を継続し、早期発見と組織的な対応で早期解決ができるようにする。
					3	月1回、『生命尊重』『思いやり』に関する指導を行う		3	学期末に継続しているいじめの件数が学校全体で1件		
					2	学期に1回、『生命尊重』『思いやり』に関する指導を行う		2	学期末に継続しているいじめの件数が学校全体で2件		
					1	1回も『生命尊重』『思いやり』に関する指導をしていない		1	学期末に継続しているいじめの件数が学校全体で3件以上		
特別活動	児童に主体的に学校生活上の課題を解決させることを通じて、人と共に考える力を身に付けさせる	・話し合い活動の6年間の系統性を明確にし、児童会活動や学級活動の中において諸問題を自主的、実践的に解決する力を高める。	・特別活動部から、月1回話し合いに関する情報提供や、夏休みの研修会を行う。 ・特別活動部からの情報を活用して、各学級で学級会を学期に1回以上行う。	3	4	情報を生かして話し合い活動（学級会）を月に1回以上実施する教員が80%以上	4	4	話し合いで、課題を解決するための意見を言うことができた児童が80%以上	話し合いに重点を置いて指導したことが成果につながっている。6年間系統立てて取り組んでいくことは、自然な流れで身に付けられる方法としてよい。一方的に目標を与えるのではなく、子供の願いや思いにそった目標をもたせていくことが大切であり、引き続き取り組みさらに充実させてほしい。	学級活動などでとまらず、各教科や道徳及び総合的な学習の時間で話し合い活動を取り入れた授業を行い成果を上げることができた。今後は、話し合い活動に有効な手立てや授業法の情報や教員間で共有し、さらに充実できるようにする。また、夏季休業中に話し合い活動に関する校内研修会を行い、指導する側の質を高めていくようにする。
					3	情報を生かして話し合い活動（学級会）を月に1回以上実施する教員が70%以上		3	話し合いで、課題を解決するための意見を言うことができた児童が70%以上		
					2	情報を生かして話し合い活動（学級会）を月に1回以上実施する教員が60%以上		2	話し合いで、課題を解決するための意見を言うことができた児童が60%以上		
					1	情報を生かして話し合い活動（学級会）を月に1回以上実施する教員が60%未満		1	話し合いで、課題を解決するための意見を言うことができた児童が60%未満		
体育	体力の向上を図る	・走力を基盤として体力向上を図り、東京都の平均値を超える ・体育の授業を通じて運動好きな児童を育て、運動の日常化を図る ・体育的行事を通じて運動の良さや楽しさを味わわせる	・ランニングタイムにおいて、初めに一周当たりのタイムを計測し、一周のタイム×学年に応じた周数で目標タイムを設定し、目標タイムを縮めた人数をクラス対抗で競わせる。 ・体育カードを作成し活用する。 ・系統図を作成し授業の中で取り入れていく。	3	4	学期ごとにランニングタイムの目標をもたせ、フォームや走り方などの指導を行う教員が80%以上	2	4	11月における50m走の記録が都の平均値以上の学年数が5以上	体力向上への取り組みがよい。ランニングタイムや持久走記録会の取り組みが成果につながっている。取り組み目標が分かりやすいのでよい。今後は、体を動かすことの気持ちよさを感じ取れるような取り組みをさらに工夫して行ってほしい。	ランニングタイムや持久走記録会、なわとび週間を設定し実践することで成果を上げることができた。今後は、体育カードの活用や体力向上への取り組みを継続するとともに、体を動かすことの楽しさや心地よさを実感できるような授業実践を工夫して行うようにする。
					3	学期ごとにランニングタイムの目標をもたせ、フォームや走り方などの指導を行う教員が70%以上		3	11月における50m走の記録が都の平均値以上の学年数が4		
					2	学期ごとにランニングタイムの目標をもたせ、フォームや走り方などの指導を行う教員が60%以上		2	11月における50m走の記録が都の平均値以上の学年数が3		
					1	学期ごとにランニングタイムの目標をもたせ、フォームや走り方などの指導を行う教員が60%未満		1	11月における50m走の記録が都の平均値以上の学年数が2以下		
食育	食への感謝の心をもち、食に関する知識及び判断力と望ましい食習慣を身に付けた児童を育成する	・心から「いただきます」「ごちそうさま」が言えるようにする ・給食の残菜量を減じる	・食に関する指導を月1回行い、食への関心を高める。 ・食育推進委員会で作成したビデオレターを作成し、児童が、生産者や調理員さんの思いを感じ、感謝の気持ちをもてるようにする。 ・児童の食に関する実態調査を行う。 ・自分で野菜を育てることで大変さを知ることや、農家の方の思いを知ること、栄養素などの知識を得ることができるようになる。	4	4	食に関する授業を年間計画に基づいて行い、給食時に食への関心を高める指導を毎日行う教員が90%以上	1	4	常時完食する児童がクラスで90%以上	給食の残菜量は、昨年度と比べて劇的に改善されている。食育の指導を今後も充実していくとよい。また、学校給食には地元野菜が提供され、食育の環境は整っている。朝ご飯をしっかり食べる習慣を家庭との連携で付けたら、第二校庭（農作業体験）を通して、食への関心を深めたりしてほしい。	食に関する指導を毎月行い、食への関心を高めることができた。給食の残菜量を月ごとに分析した結果、4月、9月など学期始めに多いことが分かった。次年度は、食べる時間を安定的に確保できるように配膳の仕方を全学年で統一する。また、食への関心をさらに高めるために、食材の生産者や調理員とのふれあい給食会を、年間各学級1回以上実施する。
					3	食に関する授業を年間計画に基づいて行い、給食時に食への関心を高める指導を毎日行う教員が80%以上		3	常時完食する児童がクラスで80%以上		
					2	食に関する授業を年間計画に基づいて行い、給食時に食への関心を高める指導を毎日行う教員が70%以上		2	常時完食する児童がクラスで70%以上		
					1	食に関する授業を年間計画に基づいて行い、給食時に食への関心を高める指導を毎日行う教員が70%未満		1	常時完食する児童がクラスで70%未満		
幼保中との連携	学びの連続性の中で、希望をもって学校生活を送る児童を育成する	・スタートカリキュラムを活用して、小学校生活への円滑で効果的な接続を行う ・児童が幼保及び中学校と定期的に交流し、親近感を持たせる ・中学校生活に対する見通しがもてるようにする	・1年生の生活科や5年生の総合的な学習の時間の年間指導計画の中で単元計画を作成する。 ・6年生が中学校を身近に感じられるよう、中学校の協力を得て部活体験や中学校教師の出前授業などの交流を実現する。	4	4	年間に10回以上、幼保中との交流活動を行う	4	4	80%以上の1年生の児童が「学校は楽しい」と答え、6年生児童が中学校生活に期待していることがあると答える	幼保中との連携がよくできている。定期的に交流する機会は十分確保されている。年長児と5年生の関わりが小学校入学後につながっていくことが、双方の子供たちにとってよい効果を生んでいる。中学校生活に期待している6年生が90パーセントいる。上手に中学生に成長させるためによりよい方法を見付け、取り組んでほしい。	入学前に交流を行ったことで、学校生活の具体的なイメージがもて、入学後の学校生活がスムーズになった。また、地域の人と関わることに楽しいと感じる児童が増えたことは大きな成果となった。次年度に向けて、今年度の反省や、幼保小連携教育推進委員会の研究結果を踏まえて、本校のスタートカリキュラムを整備し実施する。中学校との連携については、3校連携教育研究会で研究し、よりなだらかな接続を目指し実践をする。
					3	年間に8回以上、幼保中との交流活動を行う		3	70%以上の1年生の児童が「学校は楽しい」と答え、6年生児童が中学校生活に期待していることがあると答える		
					2	年間に6回以上、幼保中との交流活動を行う		2	60%以上の1年生の児童が「学校は楽しい」と答え、6年生児童が中学校生活に期待していることがあると答える		
					1	幼保中との交流活動を行うのが、年間に6回未満		1	「学校は楽しい」と答える1年生児童及び、中学校生活に期待していることがあると答える6年生児童が60%未満		